6. 書　評

「真説・企業論　ビジネススクールが教えない経営学」



著者：中野　剛志
出版：講談社現代新書
発行：2017年５月17日

「アメリカでは、シリコンバレーに代表されるように、ベンチャー企業がどんどん起業してイノベーションを起こしているのに、日本ではそういうベンチャー企業の起きやすい環境になっていない」

このような話が今まで何度も語られているが、かれこれ20年ほどたった今でも、日本はシリコンバレーのようになっていない。それはなぜなのか。この問題を考察するために、あるコンサルタントによる論考をたたき台にしながら検証を重ねている。このコンサルタントによる論考が、今まで我々が信じて疑わなかった通説とよばれるものであった。

筆者は東京大学教養学部（国際関係論）卒業後、通商産業省（現・経済産業省）に入省。若い部下が突然「ベンチャー企業でイノベーションを起こしたい」と言って辞められてしまった経験から、ベンチャー企業やイノベーションについて、それまでよりも気になるようになり、アメリカのそれらに関することを、データや研究書、ベンチャーキャピタリストやコンサルタントの証言などについて、特にベンチャー企業の本場であるアメリカに関するものを中心に調べ上げた。その結果、アメリカのベンチャー企業やイノベーションに関する衝撃的な実態が明らかとなる。本書は、その実態と、根の深い問題について、著者個人の意見として解説したものである。もともと我々が当然として信じ込んでいたビジネス上の通説、そしてその通説が事実にもデータにも基づかないものであることを、シリコンバレーを事例にアメリカのベンチャービジネスの実際のデータを客観的に解析し、一つ一つ検証しながら、物事の裏側にあるものを明らかにしていくところが痛快である。

筆者はベンチャー企業を起業したこともなければ、支援したこともない。企業経営すら未経験である。またシリコンバレーに行ったこともない。それがコンサルティングやベンチャー支援の経験が豊富なプロの議論に対して、素人である自分がその是非を判断することは、とてもできないように思えるが、プロの意見だからと言って鵜呑みにせず、自分の頭で考えるべきだと述べている。

日本には創業200年を超える企業がおよそ3500社あり、世界に冠たる老舗大国である。日本で起業し、イノベーションを起こそうと考えている方は、アメリカのベンチャー企業の幻を追いかけるのではなく、日本らしい「老舗企業の創業者になってみせる」という大きな夢を抱いてほしいと結んでいる。日本企業がどうあるべきか、アメリカ化の問題点が分かりやすく解説されており、考えさせられる一冊である。

第１章　日本でベンチャー企業を増やすには
第２章　起業大国アメリカの真実
第３章　ベンチャー・キャピタルの目利き術
第４章　最強の起業家はだれか
第５章　オープン・イノベーションの本質
第６章　なぜイノベーティブな企業のほうが負けるのか
第７章　なぜ日本経済は、いつまでも停滞から抜け出せないのか

起業教育研究会　企画委員
兵庫県立伊丹北高等学校　校長　井上仁志